

クライスラー：美しきロスマリン、愛の悲しみ、愛の喜び、ウィーン奇想曲

ウィーンには18世紀に大流行したシュランメル音楽（大衆音楽）の伝統がある。ヨハン&ヨーゼフ・シュランメル兄弟が始めた音楽スタイルで、オリジナルの編成はヴァイオリン、コントラバス、ギター、クラリネットの四重奏。シュランメルは今でも居酒屋やバーには欠かせない音楽である。これをクラシック系の奏者が演奏する場合、ヴァイオリン2、チェロ、コントラバスが定番。歌手が加わってウィンナーリートを歌ったりもする。さらにピアノが加わると、いわゆるサロン・クインテットになる。最近ではタンゴのようなポピュラー音楽も演奏されるが、やはり人気なのはシュトラウス父子のワルツやクライスラーである。

今回、演奏されるのは「美しきロスマリン」「愛の悲しみ」「愛の喜び」という3曲のワルツと、ヴァイオリンが華やかな技巧を披露する「ウィーン奇想曲」。ソロ以外の弦楽器がハーモニーや対旋律を付けて、軽快に盛り上げる最高のエンターテインメント音楽だ。

ドヴォルザーク：バガテル

プラハの音楽評論家ヨゼフ・スルプ＝デブルノフ（1836-1904）の居間は、音楽愛好家たちのサロンとなっていた。そこには当時としては珍しいハルモニウムが置かれていて、ドヴォルザークはこの楽器を使った作品を委嘱された。全5楽章の本曲は1978年5月1日から12日にかけて作曲され、サロンでの私的な演奏のあと、翌年2月2日に初演された。

チェコ民謡「バグパイプは鳴っている」の旋律にもとづく第1楽章から、音楽は温かく親密な雰囲気満たされている。ハルモニウムでバグパイプの音色を模すという趣向だ。メヌエットの第2楽章は「ソウセツカー」という民俗舞踊のスタイルによる。3つの変奏からなる第3楽章では、再び「バグパイプ」のメロディが登場。ポルカのリズムがスラヴ風の哀愁を誘う。アンダンテの第4楽章はカノン風の緩徐楽章。終楽章は快活なポルカ。中間部ではまたしても「バグパイプ」が登場し、効果的な統一感をもって全曲が締め括られる。

J. シュトラウス2世（ベルク編）：ワルツ《酒・女・歌》

J. シュトラウス2世（ウェーベルン編）：ワルツ《わたしの恋人》

J. シュトラウス2世（シェーンベルク編）：ワルツ《南国のばら》

同時代の作曲家の作品を演奏する目的で1918年、シェーンベルクはウィーンで「私的演奏協会」を旗揚げした。そこで、自身の作品に加え、弟子のベルクやウェーベルン、ドビュッシー、レーガー、ラヴェル、ストラヴィンスキー、バルトークらの作品が1921年の活動停止まで精力的に演奏された。3年間で開催された演奏会は117回、演奏曲目は154作品に及んだ。一般聴衆や評論家は閉め出され、会員のみが参加できるというスタイルを貫いたため、少人数の演奏者によるコンサートとなり、交響曲や管弦楽曲といった大編成の曲は、室内楽編成へとアレンジされて提供された。例えば、シェーンベルクによるマーラー

《大地の歌》の室内楽版は、この私的演奏協会のために編曲された作品である。

今回のプログラムで取り上げられる3作品は、1921年5月27日の特別演奏会で初演されたもの。弦楽四重奏にピアノとハルモニウムという小編成なので、3人の作曲家のアレンジの違いを聴きわけてみるのも面白いだろう。原曲の管楽器のソロやハーモニーを、いかにピアノとハルモニウムで補うかが腕の見せ所であるが、オペレッタをアレンジする仕事で苦勞を重ねたシェーンベルクの腕前が、小編成の不満を感じさせないその華やかな音づくりにおいて、頭ひとつ抜きん出ているだろうか。